錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第２４７号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2017

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：新生徒会メンバー決定
錦城生、部活動で活躍
二面：女流棋士に聞く、人生の選択
合唱祭、様々なジャンルのクラス曲

「生徒との距離を縮める」新たな生徒会始動

11月8日(水)に立会演説会・生徒会選挙が行われ、新役員が決定した。新・旧役員が集まった引き継ぎ会では、スクールバッグ改善や活動方針などが話題にのぼった。今までの反省をどう活かしていくのか、新役員の今後の活動に注目だ。

（編集部共同取材）

生徒達が注目する中、壇上で熱い思いを語る生徒会候補者たち

新生徒会への引継ぎ

11月14日(火)に和室で行われた生徒会の引継ぎ。今後の生徒会の活動方針などについて話し合いが行われた。前生徒会長の髙橋夏音さん(3D)は最初に「全員のやりたいことがそれぞれ違うかもしれない。自分の意見も出しつつ、中央委員会として何がしたいかを考えてほしい」と話した。

「ただ『これをやりたい』と先生に言うだけではなく、どのようなアプローチをすればやりたいことを実現できるか、見つけることが大事です」と伝えた。

生徒会の活動方針について新会長の村本さんは、中央委員会などの委員会活動を見直し、学校生活に反映されるようにしていきたいと述べた。

さらに「意見箱などの様々な手段で生徒の声を聞いて、不満があれば改善していく」と意気込んだ。

次に、中央委員会の意見箱に「リュックを使いたい」「スクールバッグを変えてほしい」などの意見があったことに関して話し合いが始まった。現在は基本、スクールバッグで登校することになっている。部活で許可をもらっている生徒などは部活のリュックや肩掛けのバッグなどの使用が可能だ。先日行われたアンケートは生徒がスクールバッグについてどのように感じているか、不満があればどうしてほしいかを知るために取ったものだ。

これからは代議員会で集計されたアンケート結果を基に、中央委員会が代議員会と連携して話し合いを進めていく予定だ。

村本さんは「今回の生徒会役員は今まで中央委員を経験していない人が多く、みんなたくさんの課題を出してくれた。これからは生徒と生徒会のすれ違いをなくし、生徒の不満を解決していきたい」と話す。今後の生徒会の目標は「生徒と生徒会の距離を縮める」に決定した。

＊＊＊

新生徒会今後も新聞委員会は新生徒会の活動を取り上げていく。新メンバーのこれからの取り組みに期待したい。

新役員が問題点や今後の活動方針について話し合う

前生徒会長の言葉を真剣に聞く生徒会メンバー

快挙つぎつぎと錦城の秋

関東大会に向けて意気込む池崎さん

将棋部 関東・全国大会へ

11月3日(金)に都立大泉高校で行われた2017年度関東・新人大会東京都予選に将棋部が出場した。女子個人の部で第3位となり、12月の関東大会、1月の全国新人大会に出場を決めた。入賞した池崎可南子さん(2E)は、「他校に強い1年生がいて全国に進めないかなと思ったのですが、想像以上の結果が出て良かったです」と大会を振り返る。

普段は対局や「駒落ち」と呼ばれるハンデ戦などの練習をしているそう。「とんちんかんな質問をしても丁寧に教えてくれます」と部員に対して感謝の気持ちを表す。

12月23日(土)に開催される第28回関東大会に向けて、「実力が足りない部分があるので今まで以上に集中したいです」と意気込んだ。池崎さんは関東大会だけでなく、来年の1月26・27日の第26回全国新人大会の個人女子の部にも出場が決まっている。これからも将棋部の活躍を期待したい。

ハンド部 初のベスト8

11月18日(木)の東京都高等学校ハンドボール秋季大会兼全国高等学校ハンドボール選抜大会都予選にてハンドボール部女子が初の都ベスト8に輝いた。部長の秀徳冴子さん(2L)、部員の香山素子さん(2B)、川村はなさん(2J)ら3人に話を聞いた。

都大会ベスト8に喜ぶ3人

部長の秀徳さんは「新しいチームとしての初めての公式戦でベスト8として結果を残せて良かった」と語った。また川村さんは「目の前の一つひとつの試合に勝つことを考えてやってきたのでベスト8という実感があまりないです」と心境を明かす。普段から男子とも練習することで速い球にも冷静に対処できるようになったそうだ。

これからの目標は都ベスト4に入り、関東大会に出場すること。香山さんは「ベスト8になったことが自信に繋がればいいと思います」と締めくくった。

（紅）

～新生徒会役員の演説より～

生徒会長 村本夏望さん（2A）

「今何人がつまらないと思っているでしょうか」と始め、会場が話を聞くよう促す。前副会長として前期生徒会の反省を述べ「生徒会は学校を変えるため、生徒一人ひとりの意見に寄り添いたい」と締めくくった。

生徒会副会長 松本千冬くん（1H）

一度きりの高校生活を無駄にしたくない、という理由で立候補した松本君。「生徒が校則を破ってしまうのは、今の錦城を面白くないと思っているから」と言い切る。「錦城を変えます」と真摯に述べた。

監査委員長 小嶋祐輝くん（2A）

携帯認可を例に挙げ「今の生徒会は生徒会の活動をきちんと生徒に知ってもらっていません」と指摘。「生徒と生徒会の距離を近づけます」と宣言し、生徒のために生徒会活動をしていくと公言した。

監査副委員長 小林俊介くん（1A）

各部活動・同好会・委員会へ予算が足りているかのアンケート行ったり、どのように予算が使われているかなどの調査をしたり、生徒会の活動を広げていくと話した。「母校をより誇れるような錦城にします」と熱く語った。

錦城祭実行委員長 近藤惟さん（1B）

今年の錦城祭の反省点(ごみの分別ができていない、今年の錦城祭のテーマが意味不明など)を挙げ、今年の4月から錦城祭実行委員会で活動してきたことを強みに「今まで以上に皆で楽しめる錦城祭にします」と宣言した。

「投票が正確に行われるよう来年へ」今回の選挙を振り返って

選挙管理委員長

今回の生徒会選挙について選挙管理委員長の寺島日菜子さん(2C)に話を聞いた。立会演説については、「応援演説者が個性的で盛り上がり、生徒がよく話を聞いていたように思います」と話す。

しかし今回は無効投票が10票と多かったそうだ。今回の投票用紙の記入では、信任・不信任の欄は正しくても、決選投票の名前を書く欄を間違えていると無効になってしまう。投票用紙の記入方法は各クラスの選挙管理委員が説明しているはずだが「きちんと伝わっていなかったということなので、委員にも責任があります」と寺島さん。もうひとつの反省点として、たまに委員が時間通り委員会に集まらなかったことを挙げた。

最後に「来年はできるだけ無効投票が少なく、正確に投票が行われるように、来年度の委員に引き継いでいきたいです」と意気込んだ。

「今年は開票作業が早く終わりました」

選管反省会

11月16日(木)に書道室で選挙管理委員会の幹部が今回の選挙の反省会を行った。挙げられた反省点は、立会演説会で候補者が規定の時間を超えて演説を続けたことや無効票が多かったことなど。幹部の4人が顧問の大崎拓海先生と共に改善点を話し合った。

他にも、投票箱の製作など、来年度からはより実際の選挙に近づけたいという意見が出た。一方で、投票箱の製作には大きな労力がかかるなど課題もある。

＊＊＊

今回の選挙も無事に終わったものの、無効票の多さなど反省が残った。来年度はより良い選挙が行われるよう選挙管理員会の動きに期待したい。

（藤・日・巴）

反省点を話し合う選挙管理委員

挨拶の徹底で不審者対策を

錦城の安全守る警備員

警備員が常駐となるため設置された警備員小屋

錦城では夏休みから警備員が配属され、10月から正式に常駐となった。それに伴い警備員小屋が設置された。警備員の草津誠一郎さんに話を聞いた。草津さんによると草津さんは週5日、仕事をしており、主な仕事は錦城生への挨拶や、正門の施錠、来校者への対応だという。朝、帰りの挨拶では、錦城生は挨拶を返してくれる生徒が少ないという印象を受けた草津さん。「夏に比べたら徐々に増えてきているが、それでも半分くらいの生徒しか返してくれない。警備の上でも挨拶はしっかりしてほしい」と語る。草津さんによると、錦城内で声掛けが増えるだけで不審者への対策となるそうなので、まずは挨拶を返すことを徹底しよう。

（天）

むらさき草

ある日の学校帰り。いつも通り電車に乗ると、普段よりやや混んでいた。何があるのかと調べるとその日はプレミアムフライデーだった。実際にどのような内容なのか疑問に思い調べてみた▼プレミアムフライデー(略称「プレ金」)は政府・経済界が提唱し今年2月に始まったキャンペーン。主な目的は消費喚起と労働改革で、月末金曜日に15時退社して夕方の時間を有効活用しよう、というものだ。しかしプレミアムフライデー推進協議会の文献によると、初回のプレ金で早期退社した人は17%。先月は11%と減少している▼このような結果が出たのは実施日に問題があるという。産経新聞グループのサイトによると、年度末やGW前の目立たないプレ金をサラリーマンは意識せず、何もしないで帰ったため浸透しなかったそうだ。さらに早く帰っても仕事量は減らず、別日に残業が必要である。これでは労働者の負担は変わらず「二兎を追う者は一兎をも得ず」だ▼ところで錦城生はどうだろうか。筆者は日々勉強や部活で忙しく、休養があまり取れない。夜遅くまで勉強していることもあるため、教室で眠くなることもしばしば。睡眠を削ってまで勉強しているが、睡眠時間は記憶が整理される時間。そんな大切な時間を削ってしまうのは勿体ない上、そのせいで授業中寝てしまったら一石二鳥とはならず、プレ金と同じとなってしまう▼そこで朝早く起きて勉強するのはどうか。茂木健一郎の著「脳を活かす勉強法」によると、朝は情報が整理された状態のためより集中して勉強できるという。眠気や疲労を感じたら無理せずに寝てその分早起きして勉強すれば、授業に集中して臨むことができ、まさに一石二鳥だ▼先程言ったように日々忙しい錦城生。その中休むためには、睡眠は眠気や疲労を感じたときに取り、自分の負担になるプレ金のようにならない「一石二鳥」な休養を取るのが良いだろう。

（蘭）

「泣いても負けてもまたやり始めて」

錦城卒業生の女流棋士

小学6年生で棋士としての資格を獲得し、現在も女流棋士として活躍の幅を広げている本校42回生の上田初美さん。今回、編集部は将棋部と共に単独インタビューを行った。

「棋士は好きなことができる夢のある職業です」と上田さん。
自らの力で自分の人生を切り開いてきた

上田さんの錦城生時代

高校時代、勉強と将棋はその時々でどちらかに比重をおいて両立していた上田さん。後悔は部活を3年間続けられなかったこと。元々、バスケが好きでバスケ部に入部するも、将棋から離れている時間は長くない方が良いと思い断念。「もしやり切っていたら、また違っていたのかも」と少し残念がった。

また、錦城の文化祭で出会った同じ趣味を持つ友人とは今でも交流を続けているという。自身の経験を踏まえて「錦城は生徒数がとても多い。だからこそ、長く付き合っていける友達と出会える。勉強も部活も大事だが、何よりも人を大切にしてほしい」と話す。

上田初美さん　今までの経歴

大会
- マイナビ女子オープン：5回（第4期-2011年度～6期・8期・10期）
- 女流名人：2回（第39期-2012年度・第43期）
- 女流王将：1回（第31期-2009年度）
- 大和証券杯女流最強戦　1回（第6回-2012年度）

将棋大賞
- 女流最多対局賞　第37回（2009年度）
- 女流棋士賞・名局賞特別賞　第40回（2012年度）
- 女流棋士賞・名局賞特別賞　第44回（2016年度）

将棋との出会い

上田さんが将棋を始めたのは5才の時。当時女流棋士は少なく、道場にいる小学生の女子も2人ほどしかいなかったそうだ。幼少期は対局で負けるとすぐに泣いた。しかし泣いて終わるのではなく「頑張ろう」と自分を奮わせ、また挑戦することが強くなる秘訣なのだと上田さんは笑顔で教えてくれた。

既に有段者だった小2の頃に『プロにならないか』との声掛けがあったことで女流棋士という職業を知り、目指すようになったそう。　ただ、実際になってみると、女性で将棋を指すことの壁を感じたそうだ。男性の将棋の歴史は400年というのに対し、女性は50年と短い。「女性だから」と男女の違いを指摘されることも多い。

そんな時上田さんは自分を見失わないためにも『自分がどういう棋士になりたいか』を考えたそうだ。その結果、「今は将棋の普及活動も大切だが、プレイヤーとして楽しませることに重きをおきたいと思うようになった」という。

上田さんへ質問をする生徒たち

「試合で負け続ける時期でも、応援してくれる人に感謝している。実際の試合では一人だけど、私は色んな人の気持ちを背負って戦っているんです」と微笑む。

悩んだ進路選択

高校の授業中にも将棋をしていたほど将棋が好きな上田さん。しかし将棋を始めた頃からずっと女流棋士を目指していたというわけではない。この先何十年も、自分がプロをやっていけるのかと悩んだそう。地元を離れて歯科医師を目指すか、将棋の道に進むかの選択を迫られた時、「やはりやり続けたい」と上田さんは将棋を選んだ。

将棋部部員と親しげに交流

高校生の進路選択については「好きと得意は別。後から悔やんでも自分で選んだことだから言い訳ができないので、選択は自分でするべき」とアドバイス。また「将棋でも何でも失敗しても落ち込むのではなく、当たり前だと受け止めて次に進むことが大切」とも教えてくれた。

今後目指してゆくもの

尊敬する棋士としては、羽生善治九段を挙げる。七冠を達成した多忙な時期でも「必要だから」と英会話を習い、今ではネイティブ並に話せるなど、数々の逸話を残している人物だ。上田さんは羽生さんと拠点が一緒のため会う機会は多いが「話すたびに今でも緊張する」と笑顔で話した。

2才の娘がいる上田さん。「娘が幼稚園に入園すると自分の時間ができるのでまたタイトルを取りに行きたい」と話してくれた。上田さんは、過去に二度「女王」のタイトルを獲得している。女性のタイトル戦は年に6回開催され、時間制限のあるトーナメント形式で戦う大変な試合だ。タイトル戦では決まって和服を着用している。「和服でタイトル戦という大きな試合の特別感を出すことで、若手の棋士や観客に憧れに思ってほしい」と話す。

＊　＊　＊

努力することが前提の厳しい将棋界を生きる上田さん。日々自ら選択し道を切り開いてきたからこそ、現在の強さがあるのだろう。

特色ある合唱曲が勢ぞろい

合唱祭まで2ヶ月

「皆で楽しんで」と福室さん

今年の合唱祭は？

合唱祭まであと2か月。合唱祭に向けての準備が始まりつつある中、合唱祭実行委員長の福室友希さん（2F）に取材した。今年のクラス曲の特徴として、メドレーやJ－POPなどの曲が多いことが挙げられる。「パフォーマンスなどで盛り上がりそう。生徒皆に楽しんでほしいので嬉しいです」と話す福室さん。

全体合唱はクラス曲発表前最後の声出しとなるので重要だが、去年全体合唱の曲を歌ったことがない生徒がいたそうだ。そこで今年、生徒が知っていそうな曲を絞って各クラスにアンケートを取り、多かった「COSMOS」を今年の全体合唱としたという。また、去年大流行したインフルエンザ対策として、換気を呼び掛けていく予定だと話す。

最後に「今年は昨年より盛り上がれるよう委員でアイディアを出し合っています。合唱祭も錦城祭のような全員に楽しんでもらえる行事にしたいです」と意気込んだ。

クラス曲選択の理由

今年は合唱曲ではないものを合唱するクラスが多い。メドレー曲、合唱曲を歌うクラスの合唱祭委員それぞれに取材した。

2Aは今年「レ・ミゼラブルメドレー」を歌う。合唱祭委員の鈴木寧々さん（2A）は、「ミュージカルのメドレー曲はかっこよくて聴きごたえがあります。新しいことに挑戦するつもりでも選びました」と話す。

合唱曲「ヒカリ」を歌う2Bの合唱祭委員の杉本和さんは「金賞を目指すためにも合唱曲を選びました。『ヒカリ』を歌ってクラスみんなで一つのものを作り上げたいです」と話す。高校生でもこれだけ人に訴えることができるんだ、と聴く人に思わせたいという。「2B以外には金賞取らせません」と気合十分だ。

（藤）

錦城卒業生　石巻ボランティアレポート

みやぎ総文特集～震災から６年半⑤～

今年の夏、本校卒業生の三井桃子さん（５２回生）が宮城県石巻市でボランティア活動に参加した。今回は『石巻復興きずな新聞舎』でボランティア活動をした三井さんの体験を元に作成したレポートを抜粋し紹介する。この新聞舎では、主に仮設住宅に住む方々を対象に、石巻のイベントや日常生活に役立つ情報などを掲載した石巻復興きずな新聞を発行。三井さんは新聞配布のスタッフとして参加した。

一日目『心の復興は終わらず』

8月6日、石巻に着いた。テレビで見るよりも町が整備されているように思えた。その後、「石巻ニューゼ」に向かった。館長の武内さんが、震災当時の石巻の人々、記者のこと、ジャーナリズムのことについて熱く語ってくれた。一番心に刺さったのは、津波でお母さんを失った息子さんの話。津波が押し寄せる中、息子さんは必死にお母さんの手を離さないようにしていた。しかし、残酷にも津波はその手を遮った。息子さんだけが助かった。今でも当時の状況がフラッシュバックされ、手が離れる感覚を忘れられないようだ。「心の復興」は終わらないことを痛感した。

今回の活動の説明を受ける

二日目『とにかく楽になりたい』

この日は、最後にできた仮設住宅である南境団地に配布を行った。このボランティアの中で一番胸に刺さる話をしてくださったおばあちゃんに出会った。津波で家が半壊し、一時避難所には戻ったが会社の経営をしていたこともあり、自宅に戻ってしまう。それから借金をして従業員の給料を支払い、家を売った。復興住宅に住める条件として、家が全壊していること、家を売っていないことが挙げられる。だからおばちゃんは復興住宅に移る権利を持っていない。

その年の9月、「私的助成ガイドライン」という支払能力がないとみなされた場合に借金がなくなる制度ができた。おばあちゃんはこの時のことを「なんでもっと待てなかったんだろう」と悔しそうに振り返る。話の中では何度も「仮設がなくなる前にコロッと死ねないかな」「とにかく楽になりたいんだよ」と繰り返された。私は相づちすら出なかった。

三日目『きっと報われるから』

前から気になっていた「パン工房パオ」へ足を運んだ。ドアを開けるとぴんぴんしたおばあちゃんが迎えてくれた。この店も津波の被害を受けた。おばあちゃんは強い眼差しで「津波が来たら身一つで逃げなきゃいけない」と私たちに言い聞かせてくれた。そして、「今やっていることはきっといつか報われるから。焦らなくていいんだよ」と微笑みながら語った。元の生活を取り戻そうと前向きに頑張っている方に出会うことができた。おばあちゃんの目は石巻の「復興」を見ているように目が希望で満ち溢れ

新聞舎の皆さんと笑顔の三井さん
（下段右から２番目）

ボランティアを通して

私は、以前錦城新聞で、石巻でボランティア活動をする先輩を取り上げたことがある。その先輩が言った「心の復興がまだ進んでいない」という言葉が私の頭には残っていた。その本当の意味が今回分かった気がする。

津波で襲われた記憶は二度と消えない。その人たちが何も津波を経験していないわたしたちと同じように生活することは可能だろうか。復興住宅や一戸建ての家が建つ中で、空き家が連なる仮設住宅にいる人はどの様な思いで毎日を過ごしているのだろうか。復興住宅に移転する権利のない人は何を希望としているのだろうか。復興が進むからこそ、色々な事情で復興できていない人との「気持ち」や「生活」の格差は広がっているように思える。

（三井）

石巻ニューゼ：石巻日日新聞を通した石巻地域の歩みをたどる資料などを展示している石巻市にある施設。

こだいら食い倒れ

小平ブランドめぐり

今回はカエル大好き3人組で小平市美園町にある「カフェラグラス」に行ってきました。小平駅南口から徒歩4分のところにあり、店内はゆったりとした寛げる雰囲気になっています。店主の松村三智子さんによると、小平のものを使うことで、地元の人に愛着をもってもらえているのではないかといいます。材料は生活協同組合のもので、動物性100％の生クリーム、発酵バターを使うなど子供からお年寄りまで素材の大切さを感じてもらえるようにこだわっています。赤ちゃん連れのお客さんが多く、中には相席で仲良く話をしているお客さんもいて嬉しいと微笑んでいました。

生の柚子をふんだんに使った「小平産ゆずケーキ」

小平ブランドに認定されているのは約6年前から発売された「小平産ゆずケーキ」。果汁が多くみずみずしい柚子が近隣の農家にあると聞き、ケーキに使用したそうです。生のままの柚子を加え、香りが広がるようにしたのがポイント。柚子の旬は12月ですが砂糖漬けにして冷凍することで、一年中使えるようにしていると話してくれました。食べてみると柚子の香りが口いっぱいに広がり、添えられた生クリームとしっとりとした生地がよく合っていました。

小平駅から近くなので、是非皆さんも足を運んでみてはいかがでしょうか。次回は青柳さんの「ぶるべーどら焼き」です。お楽しみに～！　（日）

大会報告

将棋部
▽11月3日
関東・東京都新人大会予選
関東大会・全国大会出場

ハンドボール部
▽10月8日（日）～11月23日（木）
東京都ハンドボール秋季大会兼全国高校ハンドボール選抜大会東京都予選
都内ベスト8

新聞委員会では大会報告を募集しています。職員室前の用紙に報告したいことを記入し、箱に入れてください。

生徒会動静

11．7～11．21

11月7日合唱祭実行委員会
8日選挙管理委員会
9日選挙管理委員会
15日合唱祭実行委員会
16日選挙管理委員会
17日代議員会
ＨＲ委員会